博士論文概要

論文題目

現代日本文学における女性表象と結婚に関する研究

執筆者：泉谷瞬（立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程）

１．目次

序章
（第一部）
第一章　労働と結婚を繋ぐもの――山本文緒と絲山秋子の作品をめぐって――
第二章　暴力からの脱出／他者への接近――津村記久子「地下鉄の叙事詩」論――
（第二部）
第三章　結婚をめぐる争い――笙野頼子『説教師カニバットと百人の危ない美女』論――
第四章　教化される感覚――多和田葉子「犬婿入り」論――
第五章　包囲される／衝突する女性同性愛
　　――松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』における欲望と関係性――
（第三部）
第六章　親族関係という「蜘蛛の巣」――金原ひとみ作品の二人組と結婚――
第七章　「不幸」な結婚が意味するもの――鹿島田真希「冥土めぐり」論――
第八章　「家族」を作らないという選択――姫野カオルコの介護作品を中心に――
終章
後記

２．全体の要旨

三部八章で構成される本博士論文は、一九八〇年代以降に発表された現代日本文学における女性表象を、その背景となる社会状況と適合しながら、結婚制度・結婚イデオロギーの問題点と結び付けて多角的に考察するものである。

第一部では、一九八六年施行の男女雇用機会均等法によって、男女における労働の取り扱いの差別性が是正された事実を重視し、これ以降に女性と結婚をめぐる状況がどのように変化したのかを、文学作品より検証する。第一章では、山本文緒「囚われ人のジレンマ」と絲山秋子「勤労感謝の日」を取り上げる。結婚や労働という二項対立の観念に依拠すること無しに、主体を確立するための方法を探す現代女性の姿をこれら二作品から描出する。第二章では、二項対立を人々へ強制するような暴力性の一因が、八〇年代以降の日本において浸透を始めた新自由主義の蔓延にあることを明らかにする。新自由主義から脱却する筋道を、本章では津村記久子「地下鉄の叙事詩」を中心に、文学的な想像力による他者との接触という観点から論述する。

第二部では、結婚をライフコースの中に組み込まない（組み込めない）人々を文学作品から焦点化し、そこから異性愛主義を中心とする結婚の観念がどのように構築されているかを批判的に検討する。第三章は、笙野頼子『説教師カニバットと百人の危ない美女』を取り上げる。戦後の女性蔑視的な言論と八〇年代以降に高まるフェミニズムの狭間に立たされた女性たちを表象することで、異性愛規範を維持しようとする体制側の権力と結託する恐れを持つフェミニズムの方向性を本作が既に指摘していたことを論証した。第四章では、多和田葉子「犬婿入り」を対象とし、理想的な核家族と郊外都市であるかのように見えていた団地の風景が、法制度と人々の保守的な感覚が組み合わさることによって人為的に成立したものである

ことを作品より分析する。第五章では、自らの意思による結婚の機会と選択が存在しない同性同士の関係性という観点から、松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』とその映像化作品を比較する。文化批判だけでは解決しない結婚に潜む問題性、すなわち異性愛主義に基づく政治的課題を文学表現の視点より再検討する。

第三部では結婚と生殖の関連に注目し、「家族」を作るという営為が女性たちの人生で過大な意味付けを為され、また実態的にも影響していることを文学作品より明らかにする。第六章では、金原ひとみの小説群を取り上げ、「妊娠」や「不妊」という女性身体にまつわる事態が、女性たちをいかなる状況に立たせるものであるかを捕捉する。第七章では鹿島田真希「冥土めぐり」を、定位家族から逃れ、身体障害者の夫と新たな生殖家族を作り上げる再生の物語と読み込む一方で、それをも併呑する力を持つ「近代家族」の多様性にまつわる課題も指摘する。第八章では姫野カオルコの『風のささやき』に収録された掌編小説を対象とする。結婚を選択しなかった者が迎える親の介護という具体的な状況における葛藤を検討しながら、制度的に保障・構築される関係性（≒近代家族）とは異なる価値を持つ関係の可能性を作品から導き出した。

３．各章の要約

第一部では、一九八〇年代以降の労働状況を背景に見据えることで、女性と結婚の結節点にまつわる変容を分析した。第一章は山本文緒と絲山秋子の作品を比較し、特に八六年に施行された男女雇用機会均等法が目標とした労働の場における公平性の達成が、いかに私的領域である家庭の環境と結び付いているかを中心に検討した。山本文緒「囚われ人のジレンマ」は、女性の背負う家庭責任が私的領域における「個人」の裁量と見なされることで、労働の場における公平性が最初から担保されていないという欺瞞を浮き彫りにする。山本の小説は、この「個人」という中性的な概念が隠蔽してしまうジェンダーの不公正を、物語にゲーム理論を組み込む手法で暴き出したのである。

また、絲山秋子「勤労感謝の日」は、「労働者」と家庭に入る「女性」という二項対立を根本的に産出するものが、国民国家の存立と連接する時間概念であることを明らかにする。「国民の祝日」から周縁化されることで初めて、主人公は自らの身体に対する複合的な意味付けを認識するに至る。さらに両作を並置することで、性的なハラスメントや暴力が、職場と家庭どちらにも共有されている事実が見出された。公私の境界線が事前的に強く引かれる中、性的・経済的弱者への暴力が双方の領域を裏で繋ぎ合わせているという図式は、自明とされる公私の区分に対する再編成を促す要因となる。このような考察を経て第一章の結論部分では、九〇年代中頃に直木賞を受賞した篠田節子『女たちのジハード』を含め、現代日本文学における複数の女性と労働の表象を引き継いでいくことで、私的領域の最たるものと見なされる「結婚」に潜む政治性を逆説的に剔抉できる可能性を述べた。

第二章は、津村記久子「地下鉄の叙事詩」を分析することで、二項対立の論理を強制する暴力性の一因が、新自由主義の蔓延にあることを検討した。また、鉄道という公共空間を具体的に把握しながらも、同時にその象徴性へ踏み込むことが第二章の目的でもある。それによって導き出されるものは、日常的なあらゆる局面において合理的主体であることを強要される人々の姿であり、その中で一体誰が最終的に暴力の対象として候補に挙がるかという問題であった。普通車両と女性専用車両の二種類が選択肢として用意された環境は一見、公正なものであるかのように理解されるが、これを単純に享受した際、そうした二者択一を引き起こす権力――環境へ介入する権力の存在が見過ごされてしまう。それは、介入する権力によって用意された労働状況に適合できない人々を、私的領域（結婚・家族）へ「自己責任」として放棄する力ともなる。この点において「地下鉄の叙事詩」を精読する作業は、第一章と同様に、そうした私的領域の恣意的な構築過程を明らかにする。

第二部では、婚姻制度を自らのライフコースとは外した形で生きる女性表象を分析し、そこに内在する異性愛主義の問題を考察した。第三章で取り上げた笙野頼子『説教師カニバットと百人の危ない美女』は、第二波フェミニズムにおいて対象化されたような専業主婦の不安・悩みとは異なる位相で、結婚と否応な

く関わりを持たされてきた女性たちの存在を可視化する。さらにそこでは、同時代の日本におけるフェミニズム思想を戯画的に表象することで、異性愛規範を維持しようとする体制側の意向とフェミニズムが期せずして結託する危険性も同時に予見されていた。それを告発する契機となるものが、戦後の女性蔑視的な言論・メディアの文化に影響を受けながらも不可視化されてきた女性たちの「怒り」という感情の発露にあることを小説は物語っている。婚姻制度の基層を崩すことなく、「改良」するに留まるフェミニズムへの批判という本作が提出した疑念は、決して反動的な文脈として解釈すべきではない。このことは、発表当時の一九九九年に成立した男女共同参画社会基本法の性質から窺えるように、異性愛主義的な結婚と家族像が厳然と生き延びる状況と結果的に同期するものとなったと考えられる。

第四章では、多和田葉子「犬婿入り」から、日本の郊外都市における具体的な地域の歴史を深く追跡することで、作品と現実の呼応する瞬間に接近した。高度成長期の状況を反映した「郊外文学」の系譜とも照合しながら、本論では、戦後の「占領」という現実を巧妙に不可視化することで、理想的な郊外都市と異性愛の核家族像を成立させた地域の裏面を提示する小説の方法を論証した。本作の舞台となった東京都国立市が文教地区指定を受けることとなった経緯には、まさに自身たちが住まう環境を浄化しようという政治運動が根本に潜んでいるのであり、そうした歴史そのものを擬人化したような登場人物たちは、「犬婿伝承」の民話により保守的な感覚が攪乱されていく。八〇年代以降に「脅威」の対象として認識される HIV の問題も織り込みながら、本作は異性愛の規範が「他者」を排除する作業によって構築されていく過程を剥き出しにしたのである。

第三章・第四章で対象とした二作は双方とも、戦後に主流となった結婚の規範的なありように異議申し立てを行っている小説だが、そもそも日本の婚姻制度における根本的な問題の一つには、異性同士のカップルにしか結婚を認可しない点が存在している。そのため、個人の恋愛関係や共同生活を結婚という契約によって結実させることが規範的な日本において、「同性愛」の関係性は明らかに非対称的な立場に置かれている。このような観点から、第五章では松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』とそれを原作とした映画を並行して取り上げる。二つの表象を統合的に読解することで、結婚に潜む政治的課題を浮上させることを試みた。そこでは異性愛主義を基底とする現状に意識的でないまま、「多様な性愛」の表現として作品を称揚することの問題が指摘された。また、映画で用いられた色彩を伴う演出が、女性同性愛の本質主義的な特殊化を回避する側面を持ったのと同時に、「同性愛／異性愛」の非対称的な構図を隠蔽しかねない両義的な作用を備えていたことが判明した。さらに、世界的な潮流として現在高まる同性婚の問題と絡めて両作品を鑑賞する際、既存の家族関係を拡張するような法的承認＝「同性婚」への傾倒とも、あるいは婚姻制度自体の廃止という極端な改革とも接続されない『ナチュラル・ウーマン』の独自性を作品表現から導き出した。

第三部では、現代女性の生活が生殖と密接に絡み合い、主体的な家族の形成如何によって人生が意味付けられ、さらに少なくない影響を与えられる様相に焦点を当てた。第六章は、金原ひとみの諸作品をめぐって、それらに表象される女性身体と生殖の問題を検討した。特に金原の「婚前」と『マザーズ』という対極的な物語をそれぞれ補完的に論じることで、結婚を選択した女性が、外部からの圧迫のみならず、自らの意思によっても出産・妊娠の概念と接続されていく複合的な状況を明らかにした。「婚前」の語り手は「不妊」の体質であることから、生殖の問題とは距離を取った態度を示していたが、伴侶との親族関係に組み込まれる際の快楽に接することで、自らを妊娠・出産の構造へ投げ込んでいく。また、『マザーズ』では、複数の母親たちの葛藤を列挙することで、女性身体が社会内部で「母」としてどのように意味付けられていくかが克明に描かれている。これら二つの作品には、身体を介在した自らの感覚と経験が画一化されていく流れが表れているものの、しかしそこに埋め込まれた微かな違和感を拡張する作業も、読者には同時に要請されることを述べた。

第七章では鹿島田真希「冥土めぐり」を対象にして、定位家族に位置する女性へ分析の視点を移す。呪縛となっている定位家族から脱出するために見出される方途としての結婚＝生殖家族の形成を、文学史における「母娘関係」と、障害学研究におけるセクシュアリティに関する知見を援用して論じた。障害者にとって通常、「脱家族」の指標となるのは自らの結婚であるが、「冥土めぐり」に登場する夫は結婚後に中

途障害を持つこととなったため、こうした経過は存在しない。その代わりに、主人公である女性が「脱家族」の役割を担う作品の展開は、近代家族の内部で「女性」と「障害者」が被る抑圧と「脱家族」の必要性を切り結ぶものであった。こうした点から、「冥土めぐり」は現代社会における結婚の意義を肯定的に提出するのだが、しかし異性愛の観念に則った結婚の形を遂行する以上、そこには常にマジョリティの価値規範に取り込まれる恐れも付随することも指摘した。

第八章は、姫野カオルコ「横浜なんかに住んでてすみません」を中心に、超高齢社会における老親介護問題を一つの切り口として臨んだ。第七章の「冥土めぐり」では、抑圧的な親から逃れる術としての結婚が設定されていたが、そうした道を選ばなかった女性の物語がここでは提示される。本作は、作中に散在する遠距離介護にまつわる極めて具体的な情報を註釈することで、女性の置かれた状況が再現される構成となっている。ここから明らかになるのは、外部から親子関係の規範的なイメージが固定化されることで、全く身動きが取れず、血縁関係の桎梏に苦しめられる女性の境遇であった。八六年に施行された男女雇用機会均等法の恩恵を受けたと推定される主人公は、しかしライフコースにおいて家族を作らないという選択をしたことで、孤独から救済される居場所も失ってしまう。すなわち、継続的なパートナーを得るということが主体にとって精神的な安定を得る唯一の方法として認識される、そうした社会的な布置の偏りを本作は明示する。それを選択「する／しない」にかかわらず、女性の人生を強く規定する「結婚」の問題とは、このようにして第一部の課題である「労働」とも再び連関していくことが明らかになった。

４．成果のまとめ（結果・考察）

本論は、一九八〇年代以降に発表された現代日本文学における女性表象を、「結婚」の制度・概念と密接に関連付け、一貫して考察の対象とすることで、性差別の撤廃を目指して様々な法制度や環境が整備され、着実な進展がそこに窺える現在にあってもなお存在するジェンダーの不均衡な状況を明らかにした。しかし、本論の特色と意義は、そうした指摘のみに留まらず、既存の「結婚」とは異なり、なおかつそれを相対化し得る主体と親密性の実践に関する具体的な思考を同時に提出した点だと考える。

第一部と第二部・第三部で見出される親密性は、その特質が大きく異なっている。第一部の作品分析は「労働」を主な観点としたことから、論点は公的領域における不公正の問題に集中した。そこから公的領域と私的領域を繋ぎ合わせる要素を発見し、その境界線を再編することが目指された。ここで重要となってくるのは、公的領域と見なされるような生活の中で、主体の生存をある一点において保障するような親密性が立ち現われてくることである。親密性は通常、パーソナルな「情報の共有」と「相互行為の蓄積」双方を満たす必要があると想定されるが、たとえば第二章で取り上げた津村記久子「地下鉄の叙事詩」で描かれた、偶然に出会った人々の行為が積み重なる展開は、社会学が定義する「親密性」の特徴を持つものと呼ぶことは決してできない。それは「匿名性」の関係に過ぎず、人々に安定的・継続的な「愛情」や「絆」をもたらすことは滅多に無い。しかし、親密性に含まれる「愛情」や「絆」が、安定的・継続的な性質を抱えるが故に、時には強迫的なまでの連帯感を生み、親密性それ自体によって個人が抑圧される危険性も存在している。ましてや、新自由主義の思考形式が蔓延する社会では、公的領域から零れ落ちたものは、「自己責任」として私的領域に押しやられてしまう。津村の作品では、こうした困難をすり抜けるかのように、匿名的な関係性の上に成立する瞬発的な親密性が描かれる。非継続的な性質を考慮して、本論ではこうした行為が交錯する瞬間を「連帯」や「共闘」ではなく、「接触」と呼んだ。「接触」の経験に潜む好機を逃さず、自らの生存に必要な資源をこの関係性から確保するとき、「結婚」や「家族」といった私的領域から供給されていた親密性の序列は攪乱される可能性を持つのである。

第二部と第三部では、そのような私的領域における新たな親密性の形を思考した。異性愛主義と生殖は、従来の婚姻制度に不可欠な観念として根付いており、親密性の形もこれに沿うようになっている。こうした観念を相対化するために、規範的な反復が「失敗」する有様を作品から分析した。たとえば第六章で言及した金原ひとみ「婚前」は、女性の身体感覚が親族関係の恣意性に対する疑いへ接続される要素を秘めている。生殖補助技術が飛躍的に進歩する現在にあって、文学作品の読解がどのようなイデオロギーを強

化し、また解体させていくか、そのあわいに位置するような「婚前」が拡散させていく問いは決して小さなものでは無い。また、第六章で対象とした鹿島田真希「冥土めぐり」は、戦後の日本社会が高度経済成長期において理想化した「結婚」や「家族」からの逸脱、つまり一般的には「不幸」と見なされるような「結婚」に救済を見出す女性の姿が描かれる。また、福祉による支援が、二者関係（夫婦）の内側に留まらない生活形態をもたらしていることも確認できた。

金原と鹿島田の作品には、異性愛と生殖の観念が浸透した「結婚」を内側から転倒させようとする潜勢力が込められているが、そうした内破の実践以外に、別の方法が同時に為される必要性も検討した。第五章で扱った松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』は、まさに異性愛主義の外部に放り出された関係性からの、「結婚」に対する再審が貫かれていた。先行研究でも示唆されていたように、女性同性愛の関係には性愛と友情の二極に引き裂かれる表象が課題として常に存在する。どちらに偏ったとしても一方の側面を捨象する結果を招くこの難問に、本論では『ナチュラル・ウーマン』の小説と映画双方を統合的に解析することで、一つの回答を試みた。性愛に基づく関係性と、「共同執筆者」としての関係性といった異なる種類の親密性を並立させる作品の戦略は、女性同性愛における困難のみならず、異性愛関係の規範に対しても批判力を持つことが予想される。何故ならば、それは既にセクシュアリティを基盤とした生殖家族だけに一定の価値付けを行うことが無いからである。異性愛主義と生殖の絡み合った「結婚」で生成される親密性は、これらの作品を補完し合うことでその大部分が相対化されていく。

さらに第三章、第四章で考察した笙野頼子の『説教師カニバットと百人の危ない美女』と多和田葉子「犬婿入り」では、もはや人間的な性愛や親密性の形すらも越えた営みが打ち出されている。「飼い主」と「ペット」のような疑似家族を模倣するのではなく、人間と動物間で全身の感覚が共有されるような生活を結末に配置する笙野の作品や、親密性が抜け落ち、生活範囲のみが重なり合う性愛の領域を描く多和田の作品は、かつて親密性に必要とされていた条件も消去する効果を持つ。

第一部から見出された公的領域における「接触」、そして第二部・第三部で検討した私的領域における人間中心主義の相対化。結婚に代表される法的承認を受けた固定的な関係性を保留し、文学作品が想起させる異なる親密性の模索という本論の問いは、以上のようにまとめることができる。そして、こうした二つの要素を兼ね備えるのが姫野カオルコの作品である。第八章の結論部分では、生殖家族の形成に依拠せず、性別や種すら関わることのない可能性を持った全くの偶発的な「他者」、そうした存在との瞬間的な接触から喜びと親密性を取り込む人間の底力を抽出した。

本論で取り扱ってきた現代文学作品の発揮する想像力とは、日常性において不可視化された関係を露出させ、そこから貪欲に生きる力を得ようとする主体の表明として取ることが可能である。このようにして様々な世代の女性作家たちによる作品について、現代社会の状況と接合させながら、「結婚」という要素によって連関させる読解を行ったところに本論の最大の成果があると考える。

５．主な引用文献・参考文献

〈序章〉

浅野富美枝「現代　多様化する家族と結婚のかたち」（服藤早苗監修『歴史のなかの家族と結婚――ジェンダーの視点から』森話社、2011 年 4 月）

有田啓子「「家族の多様化」の深度を問う――Lesbian-mother と精子ドナーによる生殖・子育ての経験知から」（『解放社会学研究』第 21 号、2010 年 3 月）

アンソニー・ギデンズ『親密性の変容』松尾精文・松川昭子訳、而立書房、1995 年 7 月

石原千秋「母・家庭・性の変容――「第三の新人」前後」（『テクストはまちがわない――小説と読者の仕事』筑摩書房、2004 年 3 月）

上田博編『明治の結婚小説』おうふう、2004 年 9 月

上田博編『大正の結婚小説』おうふう、2005 年 9 月

上田博編『昭和の結婚小説』おうふう、2006 年 9 月

江藤淳『成熟と喪失―〝母〟の崩壊―』河出書房、1971年12月6版
大内裕和、竹信三恵子『「全身○活時代」　就活・婚活・保活からみる社会論』青土社、2014年5月
大村敦志『家族法』有斐閣、2010年3月第3版
大村敦志『文学から見た家族法――近代日本における女・夫婦・家族像の変遷――』ミネルヴァ書房、2012年2月
小笠原賢二「流動化する「家族」――『成熟と喪失』の彼方へ」(『昭和文学研究』第39集、1999年9月)
岡野幸江「家・家族・恋愛・結婚」(渡邊澄子編『女性文学を学ぶ人のために』世界思想社、2000年10月)
奥野健男「家庭と文学(上)」(『読売新聞』1963年5月7日夕刊)
奥野健男「「家庭」の崩壊と文学的意味」(『文学は死滅するか―奥野健男自選評論集』學藝書林、1990年4月)
落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、1989年12月
乙部由子『女性のキャリア継続　正規と非正規のはざまで』勁草書房、2010年12月
狩野啓子「キッチン(吉本ばなな)　ポストファミリーの可能性」(岩淵宏子・長谷川啓編『ジェンダーで読む　愛・性・家族』東京堂出版、2006年10月)
川村湊「近代文学にあらわれた家族の肖像」(『海燕』第15巻第9号、1996年9月)
木村幸雄「家庭像の変容と文学」(『国文学　解釈と教材の研究』1980年4月)
鴻巣友季子、市川真人「鴻巣友季子と市川真人の「国境なき文学団」」(『文藝』2011年1月)
久保田裕之「家族社会学における家族機能論の再定位―〈親密圏〉・〈ケア圏〉・〈生活圏〉の構想―」(『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第37号、2011年3月)
駒尺喜美『魔女の論理　増補改訂版』不二出版、1984年6月
近藤裕子「吉本ばなな」(榎本正樹、近藤裕子、宮内淳子、与那覇恵子編『大江からばななまで　現代文学研究案内』日外アソシエーツ、1997年4月)
佐伯順子「現代日本の女性作家が描く家族と母性――山田詠美・よしもとばなな・江國香織が描く「近代家族」の終焉と新しい〝親密性〟」(『タイ国日本研究国際シンポジウム２００７　論文報告集』チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座、2008年3月)
佐岐えりぬ「家族の再生はありうるか――核家族・老人家族の行方は?」(『国文学　解釈と教材の研究』第42巻第12号、1997年10月)
佐藤泉『戦後批評のメタヒストリー　近代を記憶する場』岩波書店、2005年8月
ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』竹村和子訳、青土社、1999年4月
ジュディス・バトラー「ジェンダーをほどく」竹村和子訳(竹村和子編『欲望・暴力のレジーム　揺らぐ表象／格闘する理論』作品社、2008年2月)
高田里惠子『女子・結婚・男選び――あるいは〈選ばれ男子〉』ちくま新書、2012年7月
田中和生「家族小説の現在」(『群像』2006年5月)
土田知則「「家族小説論」のための序章――フロイトの論考「不気味なもの」を出発点に――」(『文学』第10巻第2号、2009年3月)
東洋大学井上円了記念学術センター編『文学における家族の問題』すずさわ書店、1999年4月
西川長夫『日本の戦後小説―廃墟の光』岩波書店、1988年8月
西川祐子『借家と持ち家の文学史　「私」のうつわの物語』三省堂、1998年11月
長谷川啓「現代女性文学にみる家族と性のゆくえ」(『新日本文学』第43巻第4号、1988年4月)
長谷川啓「結婚」(『社会文学事典』冬至書房、2007年1月)
長谷川啓「フェミニズム／ジェンダー批評で読む〈家族〉表象――日本の近現代文学・メディアにみる近代家族の変遷と現代家族――」(『城西短期大学紀要』第29巻第1号、2012年3月)
水田宗子『二十世紀の女性表現――ジェンダー文化の外部へ』學藝書林、2003年11月
森岡清美、望月嵩『新しい家族社会学』培風館、1997年12月第4訂版
吉田司雄「恋愛・癒し・結婚――吉本ばななと江國香織」(『国文学　解釈と鑑賞別冊　女性作家《現在》』

2004年3月）
与那覇恵子「現代文学にみる〈家族〉のかたち」（村松泰子、ヒラリア・ゴスマン編『メディアがつくるジェンダー　日独の男女・家族像を読みとく』新曜社、1998年2月）
与那覇恵子「女性文学の新たなうねり」（『文学』第9巻第2号、2008年3月）
渡邊澄子「現代女性文学」（今井泰子、藪貞子、渡邊澄子編『短編　女性文学　現代』おうふう、1993年11月）

〈第一章〉
「向学心に燃えた時　女たちの現実との戦い」（『読売新聞』1999年10月4日朝刊）
秋山英三「「社会的ジレンマ」をゲーム理論で解く」（中山幹夫、武藤滋夫、船木由喜彦編『ゲーム理論で解く』有斐閣、2000年11月）
絲山秋子「２＋１」（『ニート』角川文庫、2008年6月）
絲山秋子「勤労感謝の日」（『沖で待つ』文春文庫、2009年2月）
ウィリアム・パウンドストーン『囚人のジレンマ　フォン・ノイマンとゲームの理論』松浦俊輔監訳、青土社、1995年3月
内田正男『暦と時の事典』雄山閣、1986年5月
上野千鶴子、信田さよ子『結婚帝国　女の岐れ道』講談社、2004年5月
江原由美子、栗原彬「セクシュアル・ハラスメントの権力作用」（『現代思想』第28巻第2号、2000年2月）
大羽綾子『男女雇用機会均等法前史―戦後婦人労働史ノート―』未来社、1988年9月
岡田芳朗、伊東和彦、後藤晶男、松井吉明『暦を知る事典』東京堂出版、2006年5月
片上平二郎「ニート資本主義　魔の三十五歳を強いる社会」（『大航海』第58号、2006年4月）
キャサリン・A・マッキノン『セクシャル・ハラスメント　オブ　ワーキング・ウィメン』村山淳彦監訳、こうち書房、1999年8月
久場嬉子「女性労働のいま――男女雇用機会均等法制定四半世紀を経て――」（『女性労働研究』55 号、2011年3月）
熊沢誠『女性労働と企業社会』岩波新書、2000年10月
河野多惠子「栗田さんは佳い」（『文藝春秋』2004年9月）
小山静子『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房、1999年10月
篠田節子『女たちのジハード』集英社文庫、2000年1月
篠田節子「企業社会における女の〝聖戦〟」（『ＳＡＰＩＯ』1997年10月22日）
清水節「占領期「国民の祝日に関する法律」の制定過程」（『藝林』第57巻第1号、2008年4月）
スーザン・M・オーキン『正義・ジェンダー・家族』山根純佳、内藤準、久保田裕之訳、岩波書店、2013年5月
竹信三恵子『日本株式会社の女たち』朝日新聞社、1994年5月
田辺聖子「解説　ヒロインたちへの共感」（篠田節子『女たちのジハード』集英社文庫、2000年1月）
所功『「国民の祝日」の由来がわかる小辞典』ＰＨＰ新書、2003年8月
ナンシー・フレイザー「主／僕モデルの彼方へ――キャロル・ペイトマンの『性的契約』について」（『中断された正義――「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』仲正昌樹監訳、御茶の水書房、2003年11月）
西川長夫「多文化主義から見た公共性問題――公共性再定義のために」（『〈新〉植民地主義論――グローバル化時代の植民地主義を問う』平凡社、2006年8月）
西川長夫「国民化と時間病」（『国民国家論の射程　あるいは〈国民〉という怪物について［増補版］』柏書房、2012年3月）
日本母性衛生学会監修『ウィメンズヘルス事典―女性のからだとこころガイド―』中央法規出版、2003年10月

沼田真理「絲山秋子『ニート』論」(『国文学　解釈と鑑賞』第75巻第4号、2010年4月)
水谷英夫「「セクハラ」を考える視点――「ジェンダー」「支配」「差別」」(ジェンダー法学会編『講座　ジェンダーと法　第四巻　ジェンダー法学が切り拓く展望』日本加除出版、2012年11月)
三山雅子「誰が正社員から排除され、誰が残ったのか――雇用・職業構造変動と学歴・ジェンダー――」(藤原千沙・山田和代編『労働再審③　女性と労働』大月書店、2011年1月)
牟田和恵『実践するフェミニズム』岩波書店、2001年6月
山本文緒「囚われ人のジレンマ」(『プラナリア』文春文庫、2005年9月)
若林翼『フェミニストの法　二元的ジェンダー構造への挑戦』勁草書房、2008年2月
渡辺隆裕「ゲーム理論のキーワード」(『現代思想』第36巻第10号、2008年8月)
渡邊敏夫『暦入門―暦のすべて―』雄山閣出版、1994年4月

〈第二章〉

「韓国・大邱、地下鉄放火事件　携帯で「扉が開かない」　助け求め、娘から父へ」(『読売新聞』2003年2月19日朝刊)
「下関駅、放火で炎上　７４歳の容疑者逮捕「空腹でむしゃくしゃ」」(『朝日新聞』2006年1月7日夕刊)
「特急内で強姦　乗客沈黙」(『毎日新聞』2007年4月22日朝刊)
有馬宏尚「社会の動きと大阪市営交通」(『都市と公共交通』第11巻、1988年3月)
綾目広治『反骨と変革――日本近代文学と女性・老い・格差』御茶の水書房、2012年8月
石原俊『殺すこと／殺されることへの感度―二〇〇九年からみる日本社会のゆくえ』東信堂、2010年10月
入江公康、白石嘉治、大野英士「[Interview] 労働へと駆り立てるネオリベラリズム」(白石嘉治、大野英士編『増補　ネオリベ現代生活批判序説』新評論、2008年4月)
上野義昭「日本における新自由主義の展開」(吉田勝弘・澤野義一編『新自由主義の総括と格差社会』いずみ橋書房、2009年11月)
宇野常寛「見えざる〈敵〉のリアリズム」(『文学界』2009年3月)
尾形泰伸「親密圏における暴力と「純粋な関係性」」(田中義久編『触発する社会学　現代日本の社会関係』法政大学出版局、2010年3月)
北田幸恵「ロスジェネ雨宮処凜と津村記久子に見る「プレカリアート」と「ジェンダー」」(『社会文学』第30号、2009年6月)
小関和弘『鉄道の文学誌』日本経済評論社、2012年5月
兒山真也「女性専用車両が抱える課題」(『都市と公共交通』第30巻、2005年4月)
齋藤純一『自由』岩波書店、2005年12月
佐藤嘉幸『新自由主義と権力――フーコーから現在性の哲学へ』人文書院、2009年11月
渋谷昌三『人と人との快適距離　パーソナル・スペースとは何か』日本放送出版協会、1990年2月
渋谷望「排除空間の生政治―親密圏の危機の政治化のために―」(齋藤純一編『親密圏のポリティクス』ナカニシヤ出版、2003年8月)
島﨑今日子「作家　津村記久子　疎外の苦しみを解体するものを書く」(『ＡＥＲＡ』第22巻第52号、2009年11月)
スーザン・ブラウンミラー『レイプ・踏みにじられた意思』幾島幸子訳、勁草書房、2000年3月
千田有紀『日本型近代家族　どこから来てどこへ行くのか』勁草書房、2011年3月
武田信明「小説装置としての「鉄道」」(『ユリイカ』第36巻第6号、2004年6月)
田中大介「通勤通学する身体の形成――大正期における電車交通の変容――」(『ソシオロゴス』第29号、2005年9月)
千野帽子「解説　不意打ちと励ましと。」(津村記久子『アレグリアとは仕事はできない』ちくま文庫、2013年6月)
筒井淳也『親密性の社会学――縮小する家族のゆくえ』世界思想社、2008年2月

筒井康隆「懲戒の部屋」(『懲戒の部屋　自選ホラー傑作集１』新潮文庫、2002 年 11 月)
津村記久子『君は永遠にそいつらより若い』(筑摩書房、2005 年 11 月)
津村記久子「地下鉄の叙事詩（『アレグリアとは仕事はできない』筑摩書房、2008 年 12 月)
津村記久子、石川忠司「「ポトスライムの舟」で試みたこと」(『群像』2009 年 3 月)
津村記久子、深澤真紀『ダメをみがく　〝女子〟の呪いを解く方法』紀伊國屋書店、2013 年 4 月
デヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義――その歴史的展開と現在』渡辺治監訳、作品社、2007 年 3 月
野田正彰「惨事はなぜ起こったのか　検証・尼崎列車脱線事故」(『世界』第 741 号、2005 年 7 月)
浜日出夫「親密性と公共性」(長谷川公一、浜日出夫、藤村正之、町村敬志『社会学』有斐閣、2007 年 11 月)
堀井光俊『女性専用車両の社会学』秀明出版会、2009 年 11 月
村上春樹『アンダーグラウンド』講談社、1997 年 3 月
村田陽平「日本の公共空間における「男性」という性別の意味」(『地理学評論』第 75 巻第 13 号、2002 年 11 月)
矢澤美佐紀「〈ニッチ〉としての正しい生き方――津村記久子『ポトスライムの舟』の世界観」(『国文学　解釈と鑑賞』第 75 巻第 4 号、2010 年 4 月)

〈第三章〉

井口時男「「私」が孕んだ「醜い」異物」(『週刊読書人』1999 年 2 月 26 日)
石田あゆう「女性週刊誌が支える天皇制――代表具現のロイヤル・ファッション」(佐藤卓己編『戦後世論のメディア社会学』柏書房、2003 年 7 月)
上野千鶴子『家父長制と資本制　マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店、1990 年 10 月
大越愛子『フェミニズム入門』ちくま新書、1996 年 3 月
大杉重男「純文学作家の顔」(『群像』1999 年 3 月)
落合恵美子『近代家族の曲がり角』角川書店、2000 年 10 月
加納実紀代「天皇制とフェミニズムの不幸な結婚!?」(『天皇制とジェンダー』インパクト出版会、2002 年 4 月)
草柳太蔵『愛される心』大和書房、1968 年 2 月
草柳太蔵『お嬢さんこんにちわ』大和書房、1969 年 6 月
草柳太蔵『愛の流れにあるもの』大和書房、1970 年 10 月
草柳大蔵『お嬢さんこんにちわ』大和書房、1972 年 3 月新装版
斎藤美奈子『本の本　書評集 1994-2007』筑摩書房、2008 年 6 月
斎藤美奈子「フェミニズムが獲得したもの／獲得しそこなったもの」(岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一編『戦後日本スタディーズ③　80・90 年代』紀伊國屋書店、2008 年 12 月)
佐藤亜紀『小説のストラテジー』青土社、2006 年 9 月
清水良典『文学の未来』風媒社、2008 年 12 月
清水良典「ペンだこが消えたとき――一九九〇年代の笙野頼子におけるディスクールを軸にして――」(『日本近代文学』第 82 集、2010 年 5 月)
笙野頼子「学問の限界　自覚しつつ整理」(『読売新聞』1996 年 4 月 28 日朝刊)
笙野頼子『説教師カニバットと百人の危ない美女』河出書房新社、1999 年 1 月
笙野頼子、石川忠司「魂は自分で守らなければならない」(『文藝』1999 年 2 月)
笙野頼子、渡部直己「幽霊化した悲嘆」(『文藝』1997 年 11 月)
杉原里美「婚圧、私は流されない　親や周囲の目、メディアにおどる「婚活」の文字…」(『朝日新聞』2010 年 3 月 5 日朝刊)
鈴村和成「女サイボーグの声」(『文学界』1999 年 4 月)
富岡幸一郎「説教師カニバットと百人の危ない美女」(『日本経済新聞』1999 年 2 月 28 日朝刊)
中川成美「笙野頼子」(市古夏生・菅聡子編『日本女性文学大事典』日本図書センター、2006 年 1 月
野寄勉「『説教師カニバットと百人の危ない美女』」(清水良典編『現代女性作家読本④　笙野頼子』鼎書房、

2006年2月）
藤原弘達「明日の皇室のために」（『女性自身』1965年12月6日）
ベティ・フリーダン『新しい女性の創造』三浦冨美子訳、大和書房、2004年5月改訂版
松原惇子『クロワッサン症候群』文藝春秋、1988年11月
妙木忍『女性同士の争いはなぜ起こるのか　主婦論争の誕生と終焉』青土社、2009年10月
牟田和恵『ジェンダー家族を超えて』新曜社、2006年4月
山岸凉子『山岸凉子スペシャルセレクションV　天人唐草』潮出版社、2010年4月
山田昌弘「結婚」（『岩波　女性学事典』岩波書店、2002年6月）
山本真鳥「ハイパーガミー　hypergamy」（『岩波　女性学事典』岩波書店、2002年6月）
わいふ編集部『アンチ・『クロワッサン症候群』』社会思想社、1989年3月
渡辺一衛「女性のなかの二つの近代――「女性自身」と「婦人公論」――」（『思想の科学』1963年2月）

〈第四章〉
『角川日本地名大辞典　13　東京都』角川書店、1978年10月
『大日本分縣地圖併地名總覧　昭和十二年』昭和礼文社、1989年12月
『どんなくにたち＋立川　国分寺　府中』第6号、2002年10月
『日本歴史地名大系　第一三巻　東京都の地名』平凡社、2002年7月
日本学校保健会『エイズに関する指導の手引』第一法規出版、1992年12月
小田光雄『〈郊外〉の誕生と死』青弓社、1997年9月
小田光雄「90年代郊外文学の位相」（『都市住宅学』第30号、2000年6月）
小澤俊夫『昔話のコスモロジー　ひとと動物との婚姻譚』講談社学術文庫、1994年10月
カトリン・アマン『歪む身体　現代女性作家の変身譚』専修大学出版局、2000年4月
川本三郎『郊外の文学誌』岩波現代文庫、2012年1月
川森博司「民間説話の構造――異類婚姻譚を中心に――」（福田晃編『民間説話―日本の伝承世界―』世界思想社、1995年7月3版）
くにたち郷土文化館編『企画展「まちの喫茶店」―くにたちの商店街づくり・街づくり―』くにたち郷土文化館、1997年6月
国立市編さん委員会『国立市史』下巻、国立市、1990年5月
国立町役場文書課編『国立町例規類集』第一法規出版、1962年4月
黒井千次「第百八回芥川賞選評」（『芥川賞全集　第十六巻』文藝春秋、2002年6月）
財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団、くにたち郷土文化館編『まち、ひと、くらし―写真でみるくにたち―』財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団、くにたち郷土文化館、2002年10月
佐幸信介「郊外空間の反転した世界――『空中庭園』と住空間の経験」（鈴木智之、西田善行編『失われざる十年の記憶　一九九〇年代の社会学』青弓社、2012年6月）
笙野頼子、多和田葉子「【対談】天の龍　大地の蛇」（『文藝』1995年12月）
新ヶ江章友『日本の「ゲイ」とエイズ　コミュニティ・国家・アイデンティティ』青弓社、2013年7月
高橋源一郎『武蔵野歴史地理』第四冊（有峰書店、1972年2月）
谷口幸代「『犬婿入り』の言語空間」（土屋勝彦、G．A．ポガチュニク編『多和田葉子―越境文化の中間地帯で書くこと―』三恵社、2004年2月）
種田和加子「関係＝多和田葉子」（『国文学　解釈と教材の研究』1996年8月）
多摩百年史研究会編『多摩百年のあゆみ―多摩東京移管百周年記念―』東京市町村自治調査会、1993年4月）
多和田葉子『犬婿入り』講談社文庫、1998年10月
多和田葉子『カタコトのうわごと』青土社、2007年3月新装版

中山伊知郎「学園の喪失　売春街から文教地区をまもる」（『女性改造』第6巻第8号、1951年10月）
西川祐子『近代国家と家族モデル』吉川弘文館、2000年10月
疋田雅昭「欲望する主婦たち　もしくは　抑圧される子供たち――多和田葉子『犬婿入り』をめぐって――」（『立教大学日本文学』第97号、2006年12月）
福田晃「犬聟入の伝承」（昔話研究懇話会編『昔話―研究と資料―』第4号、三弥井書店、1975年6月）
星野久美子「「犬婿入り」」（髙根沢紀子編『現代女性作家読本⑦　多和田葉子』鼎書房、2006年10月）
前田愛『都市空間のなかの文学』ちくま学芸文庫、1992年8月
満谷マーガレット「多和田葉子と「翻訳」」（荒このみ、谷川道子編『境界の「言語」　地球化／地域化のダイナミクス』新曜社、2000年10月）
山本直英「エイズと教育」（村本詔司・逢坂隆子編『エイズの周辺――エイズ学入門』法政出版、1996年3月）
芳川泰久「〈国境機械〉について――多和田葉子あるいは母語の異邦人」（『横断する文学――〈表象〉臨界を超えて――』ミネルヴァ書房、2004年9月）
若林幹夫『郊外の社会学――現代を生きる形』ちくま新書、2007年3月

〈第五章〉
「TALKY TALK News」（『キネマ旬報』第1143号、1994年10月）
『ナチュラル・ウーマン2010+1994』（Softgarage、2010年8月）
石原郁子『菫色の映画祭　ザ・トランス・セクシュアル・ムーヴィーズ』フィルムアート社、1996年3月
石原理、出口顯「シングル女性・同性カップルを対象とするＡＲＴ」（『臨床婦人科産科』第68巻第1号、2014年1月）
掛札悠子『「レズビアン」である、ということ』河出書房新社、1992年5月
ゲイル・ルービン「性を考える　セクシュアリティの政治に関するラディカルな理論のための覚書」河口和也訳（『現代思想』第25巻第6号、1997年5月）
小谷真理「レズビアン・ファロスの修業時代」（『文学界』1995年2月）
ジェイムズ・モナコ『映画の教科書』岩本憲児、内山一樹、杉山昭夫、宮本高晴訳、フィルムアート社、1993年8月
島崎市誠「『ナチュラル・ウーマン』――ヒトはヒトと結ばれうるか――」（『現代女性作家読本⑤　松浦理英子』鼎書房、2006年6月）
杉浦郁子「異性愛主義のなかの女性の同性愛的欲望――それが確認されにくいのはどのようにしてか」（好井裕明編『排除と差別の社会学』有斐閣、2009年12月）
竹村和子『愛について　アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店、2002年10月
竹村和子、村山敏勝、新田啓子「攪乱的なものの倫理」（『現代思想』第34巻第12号、2006年10月）
田崎英明「セックスの何が問題なのか」（『現代思想』第25巻第6号、1997年5月）
谷口基「『ナチュラル・ウーマン』――ウロボロスの苦悩――」（『現代女性作家読本⑤　松浦理英子』鼎書房、2006年6月）
多和田葉子「解説　逃げない小説」（松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』河出文庫、2007年5月新装版）
辻本千鶴「松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』試論」（『言語文化論叢』第6巻、2012年9月）
中村三春「レズビアン――谷崎潤一郎『卍』／松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』」（『国文学　解釈と教材の研究』2001年2月増刊号）
堀江有里「レズビアンの不可視性　日本基督教団を事例として」（『解放社会学研究』第18巻、2004年4月）
松浦理英子『セバスチャン』文藝春秋、1981年8月
松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』河出文庫、2007年5月新装版
松浦理英子、佐々木浩久「ナチュラル・ウーマン」（シナリオ作家協会編『'94年鑑代表シナリオ集』映人社、1995年5月）
松浦理英子、堂山夏人「性の境界線を越えて」（『早稲田文学』1989年5月）

溝口彰子「「百合」と「レズ」のはざまで　レズビアンから見た日本映画」（斉藤綾子編『映画と身体／性　日本映画史叢書⑥』森話社、2006 年 10 月）
横森文「劇場公開映画批評」（『キネマ旬報』第 1153 号、1995 年 2 月）
与那覇恵子「松浦理英子―越境する性」（『国文学　解釈と教材の研究』1992 年 11 月）
四方田犬彦「解説」（松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』河出文庫、1991 年 10 月）

〈第六章〉
「恋愛の甘さと苦さ　たっぷりと」（『朝日新聞』2012 年 12 月 18 日夕刊）
Rachel Dinitto　"Between literature and subculture: Kanehara Hitomi, media commodification and the desire for agency in post-bubble Japan"　in Japan Forum Volume 23,　Issue 4, Dec 2011
浅井美智子「生殖技術による家族の選択は可能か」（浅井美智子・柘植あづみ編『つくられる生殖神話――生殖技術・家族・生命』制作同人社、1995 年 1 月）
岩本美砂子「不妊が見えない――日本におけるマジョリティの無意識構造――」（金井淑子編『岩波　応用倫理学講義５　性／愛』岩波書店、2004 年 11 月）
内田明香・坪井健人『産後クライシス』ポプラ新書、2013 年 11 月
エリザベート・バダンテール『母性という神話』鈴木晶訳、筑摩書房、1991 年 6 月
東直子「結婚の多面的な孤独」（『文学界』2013 年 1 月）
綾目広治『小川洋子　見えない世界を見つめて』勉誠出版、2009 年 10 月
江南亜美子「ひとの親になるということ――金原ひとみ『マザーズ』堀江敏幸『なずな』柴崎友香『虹色と幸運』」（『小説トリッパー』2011 年 9 月）
荻野美穂『ジェンダー化される身体』勁草書房、2002 年 2 月
金原ひとみ『アッシュベイビー』集英社文庫、2007 年 5 月
金原ひとみ『オートフィクション』集英社文庫、2009 年 7 月
金原ひとみ『マザーズ』新潮社、2011 年 7 月
金原ひとみ「母であることの幸福と、凄まじい孤独。」（『波』第 500 号、2011 年 8 月）
金原ひとみ『星へ落ちる』集英社文庫、2011 年 9 月
金原ひとみ「婚前」（『マリアージュ・マリアージュ』新潮社、2012 年 11 月）
金原ひとみ、窪美澄「可視化された〝母〟の孤独」（『小説トリッパー』2011 年 12 月）
神田法子「小川洋子全著作解題」（『ユリイカ』第 36 巻第 2 号、2004 年 2 月）
久米依子「痛みへの希求」（岩淵宏子・長谷川啓編『ジェンダーで読む　愛・性・家族』東京堂出版、2006 年 10 月）
倉田容子「「妊娠カレンダー」――エイリアン、またはサイボーグとしての胎児――」（髙根沢紀子編『現代女性作家読本②　小川洋子』鼎書房、2005 年 11 月）
小泉義之『生と病の哲学　生存のポリティカルエコノミー』青土社、2012 年 6 月
斎藤美奈子『妊娠小説』ちくま文庫、1997 年 6 月
佐川光晴『ジャムの空壜』新潮社、2001 年 9 月
ジュディス・バトラー『アンティゴネーの主張』竹村和子訳、青土社、2002 年 12 月
シュラミス・ファイアストーン『性の弁証法』林弘子訳、評論社、1972 年 11 月
白井千晶「日本における不妊をめぐる身体政治――不妊治療費への健康保険適用と公費助成を例に」（小浜正子・松岡悦子編『アジアの出産と家族計画――「産む・産まない・産めない」身体をめぐる政治』勉誠出版、2014 年 3 月）
杉浦真弓「生殖医療の現状と生命倫理」（『月刊保団連』第 1124 号、2013 年 5 月）
髙根沢紀子「「妊娠カレンダー」論」（『上武大学経営情報学部紀要』第 26 号、2003 年 12 月）
田間泰子『母性愛という制度　子殺しと中絶のポリティクス』勁草書房、2001 年 8 月
柘植あづみ『文化としての生殖技術――不妊治療にたずさわる医師の語り』松籟社、1999 年 12 月

柘植あづみ『生殖技術　不妊治療と再生医療は社会に何をもたらすか』みすず書房、2012 年 9 月
長沖暁子「当事者とは誰なのか」（非配偶者間人工授精で生まれた人の自助グループ、長沖暁子編『ＡＩＤで生まれるということ　精子提供で生まれた子どもたちの声』萬書房、2014 年 5 月）
野崎歓「女は世界の奴隷か」（『新潮』2011 年 10 月号）
野沢慎司、茨木尚子、早野俊明、ＳＡＪ編『Q＆A　ステップファミリーの基礎知識――子連れ再婚家族と支援者のために』明石書店、2006 年 5 月
藤木直実「孕む身体――女性作家の描いた〈妊娠〉の近代――」（『イメージ＆ジェンダー』第 4 号、2003 年 12 月）
安井眞奈美『出産環境の民俗学――〈第三次お産革命〉にむけて』昭和堂、2013 年 12 月
安田裕子『不妊治療者の人生選択　ライフストーリーを捉えるナラティヴ・アプローチ』新曜社、2012 年 9 月
吉武久美子『産科医療と生命倫理――よりよい意思決定と紛争予防のために』昭和堂、2011 年 5 月
よしもとばなな『イルカ』文春文庫、2008 年 11 月
吉野亜矢子「妊娠出産という物語―現代日本の妊娠本を読む―」（『アジア太平洋討究』第 9 号、2007 年 3 月）

〈第七章〉

安積遊歩『癒しのセクシー・トリップ　わたしは車イスの私が好き！』太郎次郎社、1993 年 11 月
荒井裕樹『障害と文学――「しののめ」から「青い芝の会」へ』現代書館、2011 年 2 月
飯田祐子「物語としての家族」（『現代思想』第 32 巻第 10 号、2004 年 9 月）
石川准『見えないものと見えるもの――社交とアシストの障害学』医学書院、2004 年 1 月
江南亜美子「小説は時間を超えて――赤坂真理『東京プリズン』、鹿島田真希『冥土めぐり』」（『小説トリッパー』第 117 巻第 46 号、2012 年 9 月）
江南亜美子「新・家の履歴書」（『週刊文春』2013 年 1 月 17 日）
榎本正樹、鹿島田真希「連続インタビュー　「現在」女性文学へのまなざし⑤」（『すばる』2007 年 10 月）
マリアンヌ・ハーシュ『母と娘の物語』寺沢みづほ訳、紀伊國屋書店、1992 年 9 月
鹿島田真希『冥土めぐり』河出書房新社、2012 年 7 月
鹿島田真希「受賞のことば」（『文藝春秋』2012 年 9 月）
鹿島田真希、島田雅彦「小説という祈りの儀式」（『文学界』2012 年 9 月）
鹿島田真希、笙野頼子「〝聖なる愚か者〟を探して」（『新潮』2005 年 7 月）
金巻有美「母への愛憎つづる娘たち」（『読売新聞』2012 年 10 月 2 日朝刊）
倉本智明「欲望する、〈男〉になる」（石川准・倉本智明編『障害学の主張――社会、文化、ディスアビリティ』明石書店、2002 年 10 月）
倉本智明「性的弱者論」（倉本智明編『セクシュアリティの障害学』明石書店、2005 年 6 月）
斎藤環『母は娘の人生を支配する　なぜ「母殺し」は難しいのか』ＮＨＫ出版、2008 年 5 月
笙野頼子『母の発達』河出文庫、1999 年 5 月
土屋葉「障害者自立生活運動と「脱家族」――「愛情」による「囲い込み」を問う」（金井淑子編『ファミリー・トラブル――近代家族／ジェンダーのゆくえ』明石書店、2006 年 11 月）
内藤千珠子「情熱的な憂鬱　鹿島田真希の全作を読む」（『文藝』2012 年 11 月）
中条省平、苅部直、青山七恵「創作合評」（『群像』2012 年 3 月）
中野恵美子「文学に描かれた「近代家族」と障害者」（『Rim』第 9 巻第 2 号、2007 年 11 月）
信田さよ子、上野千鶴子「スライム母と墓守娘　道なき道ゆく女たち」（『ユリイカ』第 40 巻第 14 号、2008 年 12 月）
ホーキング青山『UNIVERSAL SEX　性欲に身障も健常もない』海拓社、2002 年 1 月
前田拓也『介助現場の社会学――身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ』生活書院、2009 年 9 月
水田宗子「娘による母物語から母による母物語へ　近代文学の中の母と娘」（水田宗子、北田幸恵、長谷川

啓編『母と娘のフェミニズム』田畑書店、1996 年 12 月）
水村美苗『母の遺産――新聞小説』中央公論新社、2012 年 3 月
山口直孝「不在の父を求めるのではなく――現代型家族小説への疑念」（『社会評論』第 138 号、2004 年 7 月）

〈第八章〉
『ＪＴＢ時刻表』1005 号、ＪＴＢパブリッシング、2009 年 10 月
「姫野カオルコさんのケアノートに共感の声」（『読売新聞』2009 年 8 月 29 日朝刊）
上野千鶴子『家父長制と資本制　マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店、1990 年 10 月
上野千鶴子「葛藤は山ほどあれど　シングル・遠距離で、親の最後に向き合った手応え」（『婦人公論』2005 年 11 月 22 日）
上野千鶴子『ケアの社会学　当事者主権の福祉社会へ』太田出版、2011 年 8 月
上野千鶴子「おやじのせなか　ペット愛　それでも贈り物」（『朝日新聞』2012 年 3 月 22 日朝刊）
春日キスヨ「介護とジェンダー――家族介護を中心として」（川本隆史編『ケアの社会倫理学――医療・看護・介護・教育をつなぐ』有斐閣、2005 年 8 月）
春日キスヨ『変わる家族と介護』講談社現代新書、2010 年 12 月
木戸功『概念としての家族――家族社会学のニッチと構築主義』新泉社、2010 年 2 月
榊原智子「ケアノート　家族の葛藤　介護で噴出」（『読売新聞』2009 年 8 月 9 日朝刊）
杉本貴代江『ジェンダーで読む福祉社会』有斐閣、2003 年 2 月
税所幸子「認知症高齢者とグループホーム（重度認知症の受け入れ）」（糸川嘉則編『看護・介護・福祉の百科事典』朝倉書店、2008 年 6 月）
高林正洋「遠距離介護の現状と今後の研究課題」（『社会福祉学研究』第 3 号、2008 年 3 月）
中川敦「実の娘による「遠距離介護」経験と《罪悪感》　男きょうだいの有無による老親介護責任配分の位相」（三井さよ・鈴木智之編『ケアとサポートの社会学』法政大学出版局、2007 年 3 月）
中川敦「「愛の労働」としての「遠距離介護」：母親が要介護状態にある老親夫婦への通いの事例から」（『家族研究年報』第 33 号、2008 年 7 月）
中西泰子『若者の介護意識　親子関係とジェンダー不均衡』勁草書房、2009 年 7 月
姫野カオルコ『ドールハウス』角川文庫、1997 年 7 月
姫野カオルコ『もう私のことはわからないのだけれど』日経ＢＰ社、2009 年 6 月
姫野カオルコ『風のささやき　介護する人への 13 の話』角川文庫、2011 年 7 月
姫野カオルコ「東京と滋賀を行き来した一人娘の 30 年」（『婦人公論』2011 年 11 月 7 日）
藤崎宏子「介護保険制度と介護の「社会化」「再家族化」」（『福祉社会学研究』第 6 号、2009 年 6 月）
藤田香織「十四番目のささやき　解説にかえて」（姫野カオルコ『風のささやき　介護する人への 13 の話』角川文庫、2011 年 7 月）
堀田義太郎「介護の社会化と公共性の周辺化」（『生存学』第 1 号、2009 年 2 月）
森川美絵「ケアする権利／ケアしない権利」（上野千鶴子、大熊由紀子、大沢真理、神野直彦、副田義也編『ケア　その思想と実践４　家族のケア　家族へのケア』岩波書店、2008 年 9 月）

〈終章〉
ダナ・ハラウェイ『伴侶種宣言　犬と人の「重要な他者性」』水野文香訳、以文社、2013 年 11 月
姫野カオルコ『昭和の犬』幻冬舎、2013 年 9 月
姫野カオルコ「ジャージの直木賞作家、ダンスと執筆を語る」（『ＳＰＡ！』第 63 巻第 8 号、2014 年 2 月 25 日）
姫野カオルコ『近所の犬』幻冬舎、2014 年 9 月

〈以上〉